映像メディアの理解と表現に関する指導の系統性 —小学校国語科平成4年度版教師用指導書の分析から—

Systematicness of the instruction about understanding and expression of visual media
—An analysis of the teacher's manual in elementary school language arts for 1992—

佐藤 幸江 (人間科学部こども学科教授)

Yukie SATO (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Professor)

中川 一史 (放送大学教授)

Hitoshi NAKAGAWA (The Open University of Japan, Professor)

〈要旨〉

高度情報化社会を生きる子どもたちにとって、映像メディアの情報は、私たち大人が考えている以上に重要な機能をもっていると考えられる。しかし、これまでの小学校国語科の授業においては、言語情報の読み取りに重点が置かれており、教科書にある挿し絵や写真、図やグラフといった資料の読み取りに関しては、二次的な扱いに留まっているという現状がある。「読むこと」や「話すこと」の一部として部分的、単発的に取り上げるのではなく、映像を見る力や映像と言葉を関連化させて言語の力を育成することが、これからの国語科教育として喫緊の課題となると考える。そこで、本研究においては、小学校国語科指導書において、展開部分に記述されている挿し絵や写真などの映像メディアの理解と表現の指導に関する記述から生成された指標をもとに、指導の系統性について考察を加えたところ、低学年、中学年、高学年という発達段階の大きなくくりでの系統性はある程度考慮されているようではあるが、明確な意図があって配置されているとは考えにくいことが明らかになった。

〈キーワード〉

小学校国語科、映像メディア、理解と表現、指導の系統性

1 はじめに

平成19年度～22年度、「全国学力・学習状況調査」の4年間の調査結果から、国語科においては、文章と図表、グラフなどが複合した教材を取り上げ、それらを関係付けながら書き手の意図を推論したり、自分の考えに生かしたりする言語活動を充実することが課題との指摘があった(国立教育政策研究所2012)。また、先頃発表された72の国・地域の15歳が参加し、「読解力」「科学的リテラシー(活用する力)」「数学的リテラシー」の3分野を調べた国際的な学習到達度調査PISA 2015において、文章や資料などから情報を読み取り、論理立てて自分の考えを記述する「読解力」の平均点が前回より低下したことの指摘があった(国立教育政策研究所2016)。「知識基盤社会」「情報社会」の高度化が進み、今後、激しく変化する社会を生きるために教育も改革が求められている。

高度情報化社会を生きる子どもたちにとって、PISA型

読解力で言う非連続型テキストを含めた映像メディアの情報は、私たち大人が考えている以上に重要な機能をもっていると考えられる。しかし、これまでの小学校国語科の授業においては、言語情報の読み取りに重点が置かれており、教科書にある挿し絵や写真、図やグラフといった資料の読み取りに関しては、効果として学習者の興味関心を喚起させるものとして、二次的な扱いに留まっているという現状がある。国語の授業を行っている多くの教師たちの学習指導には、言語情報とこれらの映像情報との乖離があると考えられる。

国語科教育において、映像メディアの指導の歴史は古い。滑川(1979)は、「言語文化という概念が、いわゆることばで創られた文化として、活字化される文化財に限らず拡大してきていること」に注目し、まんがやテレビも「読む」活動となること、絵と文章と合成して豊かな表現活動をすすめることなどを提言している。その頃の国語科

教科書を見てみると、これらを教材として積極的に取り上げている。浮橋（1988）は、「映像」についての捉えは、言語の付加情報として結びついてこそ、確かな意味を確保することができるということを主張した。この主張が、この頃の国語科教育の映像に対する一般的な捉えとなっていたと考えられる。

近年、子どもたちを取り巻く様々なメディアがもたらす情報は、この頃と比較できないほど膨大なものとなってきている。井上（2003）は、21世紀の国語科教育では、文字メディアで培った力を基礎としつつ、映像メディア、コンピュータなどのニューメディアにまで守備範囲を広げるべきであるとして、学習指導要領の補充・補完を目指して、目標分析表と評価表の体系化・系統化を試みている。これらは、小学校から高校までを見通しての発達段階に応じて指導できるように構成されている。井上の構造や系統性をもとに、中村（2003）は、メディア教育の教材領域として映像を取り上げ、国語科教材観の拡張として映像メディアに注目する意義を強調している。奥泉ら（2006）は、西オーストラリア州におけるビジュアルリテラシー教育をもとに、「見ること」を言語教育の中に位置付け、絵の分析能力を情報分析力の一部として捉え、初等教育科における絵の読み解き能力の育成について提言を行った。しかし、いかに視覚的テキストを読み解くか、複雑に構成されたそれらをいかに分析的たり批判したりできるかという目標設定であり、言語情報と映像情報を複合化してみるという視点に乏しかった。

「読むこと」や「話すこと」の一部として部分的、単発的に取り上げるのではなく、映像を見る力や映像と言葉を関連化させて言語の力を育成することが、これからの国語科教育として喫緊の課題となると考える。そのためには、一般的に学習指導する際に使用される教科書にある挿し絵や写真をどのように活用して指導していくかという指導の指針が必要となってくる。

中川ら（2010a,2010b）は、これまで国語科教科書を使い、その内容に即した指導案から評価規準を抽出し、到達項目の生成を試みた。佐藤ら（2016）は、1977（昭和52）年度版学習指導要領において、教科領域が言語能力を重視する観点から「表現・理解・言語事項」となり、その指導観が定着したとみられる平成元年度版学習指導要領に準拠した1992（平成4）年度版指導書（以下、平成4年度版指導書と記述）を調査の対象として、教師が指導する際に利用する学習指導計画の学習指導の展開例の中にある指導に関する記述のみを対象として、データの抜き出しを行った。それにより、より汎用性のある指標の生成を試みた。しかし、それらの抜き出された指導に系統性が見られるのかまで明らかにしていない。

そこで、本研究において、その系統性を考察することは、今後、一般的な教師が小学校国語科教科書及び指導書を使用して、言語情報と映像情報とを複合化して授業を設計する際に大いに役に立つと考え、本研究の構想に至った。

2 研究の目的

本研究の目的は、小学校国語科指導書において展開部分に記述されている挿し絵や写真などの映像メディアの理解と表現に関する指導に関する記述から生成された指標をもとに、指導の系統性について考察を試みる。

3 研究の方法

3-1 研究対象

佐藤らが指標を生成した際には、平成元年度版学習指導要領に準拠した平成4年度版指導書（以下、平成4年度版指導書と記述）を調査の対象としている。国語科教育の内容は、言語活動や言語技能を重視する「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」とされ、長い間学習指導要領における指導内容の区分とされていたが、昭和52年度版学習指導要領においては、教科領域が言語能力を重視する観点から「表現・理解・言語事項」となった。その指導観が定着したとみられる本時代の指導書は、資料性が高いと判断したため、調査対象としている。また、取り上げる指導書は、採択数占有率の一番高く普及性があるものとの判断からM出版を取り上げていることから、本研究においても、それらを対象としている。

3-2 研究方法

次頁にある【表2】【表3】にある佐藤らにより生成された7つのカテゴリと28のラベル（下位項目）を、【表4】のように学年毎に整理し、国語科の指導事項との関連を検討しつつ、系統性を考察する。

3-3 明らかにされたカテゴリグループ【理解】

本研究においては、佐藤らが明らかにしたカテゴリとラベル（下位項目）を研究対象として考察を行うため、ここでそれらに関して若干の解説をしておくこととする。

【理解】というカテゴリグループは、「A：挿し絵や写真などから対象のイメージや状況をつかむ」「B：挿し絵や写真などと文章との対応を考える」「C：挿し絵や写真から文章の内容を推測する」「D：文章の読み取りを映像化して確認する」のカテゴリからできている。

カテゴリ「A：挿し絵や写真などから対象のイメージや状況をつかむ」では、読み取る対象は挿し絵や写真である。【表2】にあるように10のラベル（下位項目）が生成

されている。カテゴリ「B：挿し絵や写真などと文章との対応を考える」は、文章と挿し絵や写真を行き来しながら思考を深める指導となり、6つのラベルが生成されている。カテゴリ「C：挿し絵や写真から文章の内容を推測する」においては、あるひとまとまりの文章やそこにある挿し絵や写真を手がかりに、次の内容を推測する指導となり、3つのラベルが生成されている。カテゴリ「D：文章の読み取りを映像化して確認する」は、文章から読み取った情報を再構成する指導となり、2つのラベルが生成されている。

【表2：理解領域のカテゴリとラベル】

ラベル	カテゴリ	領域
ものの確認	A：挿し絵や写真などから対象のイメージや状況の読み取り	【理解】
言葉の想起		
状況の把握		
あらすじ確認		
イメージの深化		
理解の促進		
理解の補足		
情報の取り出し		
活動や方法のイメージ化		
ゴールのイメージ化		
文章からの情報を補完	B：挿し絵や写真などと文章との対応を考える	【理解】
文章との関係づけ		
文章との比較		
情報の一体化		
あらすじ把握	C：挿し絵や写真などから文章の内容を推測する	【理解】
情報の整理		
話の内容を想像		
次の話の予想		
まとまり毎に関連づけて予想	D：文章の読み取りを映像化して確認する	【理解】
イメージの映像化		
絵の並びかえ		

3-4 カテゴリグループ【表現】

【表現】というカテゴリグループは、「E：挿し絵や写真などから言葉で表現する」「F：挿し絵や写真などから文章にする」「G：挿し絵や写真などと言葉や文章と対応させながら表現する」のカテゴリからできている。

カテゴリ「E：挿し絵や写真などから言葉で表現する」は、映像メディアから読み取った内容を話し言葉で表現し、意欲や興味を喚起したり、共通事項や差異を確認したりする指導である。【表3】にあるように1つのラベル（下位項目）が生成されている。カテゴリ「F：挿し絵や写真などから文章にする」は、絵や写真、図表を手がかりに文章で表現する指導であり、2つのラベルが生成されている。カテゴリ「G：挿し絵や写真などと言葉や文章と対応させながら表現する」は、挿し絵や写真と文章を対応させて、気づいたことを話し合ったり、説明したり、演じたりする指導を含んでおり、4つのラベルが生成されている。

【表3：表現領域のカテゴリとラベル】

言葉で表現	E：挿し絵や写真などから言葉にする	【表現】
文章で表現	F：挿し絵や写真などから文章にする	
取り出した情報から表現		
気づきや想像の会話表現	G：挿し絵や写真などと言葉や文章と対応させながら表現する	
心情や感想の記述		
図を資料に説明		
劇化		

4 研究結果

【理解】領域と【表現】領域において、映像メディアの理解と表現に関する学習指導事例を比較すると、【理解】領域での指導が多く見られる。学習指導要領の改訂に当たって充実すべき重要事項の第1として言語活動の充実を挙げ、各教科等を貫く重要な改善の視点として示したのは、平成20年版の学習指導要領においてであることを考えると、この時期としては当然の結果といえよう。

全指導例として、176例の記述が見られた。そのうち低学年、中学年、高学年といくにつれて、映像メディアの理解と表現に関する学習指導事例が少なくなっていることが明らかになった。特に、カテゴリ「A：挿し絵や写真などから対象のイメージや状況をつかむ」においては、全指導例事例が67例あるうちの44例、約65%が低学年に集中している。語彙の獲得の少ない低学年においては、挿し絵や写真が理解を促す大きな情報源になっていることが分かる。また、中学年においては、カテゴリ「B：挿し絵や写真などと文章との対応を考える」の中の「文章と関連づける」の指導が他のラベルよりも多い事例が見られるが、低学年の事例から考えると、極端に少なくなる傾向が読み取れる。さらに、高学年の指導事例は、ほとんど見られないことが分かる。以下、カテゴリ毎に明らかになった系統性に関して考察する。

4-1 カテゴリ-Aから見える系統性

カテゴリ「A：挿し絵や写真などから対象のイメージや状況をつかむ」の中で、「ものの確認：それぞれのものの挿絵を見てそのものを確認する」「言葉の想起：それぞれのものの挿絵を見て言葉を想起する」「状況の把握：それぞれのものの挿絵を見てそのものの状況を把握する」「あらすじ確認：お話の文章に沿った挿絵を見て物語のあらすじをつかむ」という学習指導に関しては、低学年で多く見られる。

例えば、第1学年『おはよう』の挿し絵は、入門期において児童が最初に出会うものである。この挿し絵をもとに、指導書には、「(挿し絵から)見つけた遊びをする」という記述があった。つまり、挿し絵の中の子どもたちがしている遊びを読み取り、どのような遊びなのかを理解し言葉にすることを意図していると考えられる。そこで、「状

況把握」というラベルが付与されていることが分かる。まだまだ日常生活経験が少なく、語彙の獲得が少ない低学年の児童にとっては、教科書に掲載されている挿し絵や写真をもとに、そのものを確認したり状況を把握したりして言葉として認識する必要があり、それを意図した指導であると考えられる。

「情報の取り出し：地図や表・グラフなどの情報そのものを読み取る」に関しては、第4学年と第5学年の2事例を見るだけである。統計に関する理解は、算数科においては「資料の整理と読み」として「D数量関係」領域に属する内容である。数量関係領域は、指導要領の改訂に伴い低学年から設けられるようになり、その充実が図られていることから、国語科において、第4学年から教材の中で指導することは妥当であろうと考える。データを集めて集計しただけでは、単なる数字の集まりであり、そこから何が読み取れるか必ずしも明らかではない。得られた結果をその目的に合わせて表やグラフに表すことで、自分の考えを相手に的確に伝える手段となる。国語の学習においては、なぜそこに統計資料が使われているのか、文章構成にどのように影響しているのか等を考えさせる必要があると考える。

4-2 カテゴリーBから見える系統性

カテゴリー「B：挿し絵や写真などと文章との対応を考える」に関しては、「文章からの情報を補完：挿し絵と言葉を結び付け、足りない部分を補って読む」とことと「文章との関連づけ：挿し絵では不十分な点を、叙述を読むことによって補ったり、確かめたりする」とことの学習指導事例が多く見られる。低学年では特に多く、高学年にいくほど事例が少なくなっている。例えば、第1学年の『じどう車くらべ』では、「座席、大きな窓は、挿し絵と照応させて理解させる」という記述がある。入門期のこの時期の児童には、説明文を読んだだけでは、その内容の把握に困難が伴う。特に、この場合は「しごと」に対応する「つくり」を理解するという学習内容である。その因果律を理解させるのである。そこで、挿し絵に描かれている大勢が座れる座席や景色がよく見える大きな窓を提示し確認しながら、文章にもどって理解を促進していくのである。同じく第1学年「なぞなぞあそび」では「絵と文を比べながら、「あかい」と「くだもの」を結びつける」とある。これは、「何の絵でしょう」といちごの影を見せ、その絵とヒントの文章を一体化させることで、答えに行きつくことから、「情報の一体化」というラベルが付与されている。まだ長文に慣れていない低学年においては、このように文章の記述と挿し絵から読み取れる情報を対応させながら読むことが、理解を深めることや文章の構造をつかむことにつながっている

と推測される。高学年の数少ない事例として、第5学年『覚えることと忘れること』がある。ここでは、「挿し絵とつながりながら、新しいニューロンどうしのつながりのできることを覚えることであり、それにはシナプスの数が関係することを述べている筆者の意図について考えさせたい」という記述がある。ここは、「ニューロンやシナプス」が、どのようなしくみになっているかの理解がないと、筆者の意図を理解することもできない。そこで、脳内のモデル図を読み取り、文章と関連化させることで、その理解を促進させることになる。このような理解に関する記述に「文章からの情報を補完」というラベルが付与されているのである。このように、高学年においては、高度な内容理解が求められるが、専門的な領域に関する知識の少ない場合には挿し絵を中心に文章で解説が加えられていると推測される。

4-3 カテゴリーCから見える系統性

カテゴリー「C：挿し絵や写真などから文章の内容を推測する」の事例は少ないため、系統性という視点から考察を加えることは困難であると判断する。カテゴリー「A：挿し絵や写真などから対象のイメージや状況をつかむ」の「あらすじの確認」やカテゴリー「B：挿し絵や写真などと文章との対応を考える」の「あらすじをつかむ」のラベルとの整合性に関して再検討の可能性も示唆できる。

4-4 カテゴリーDから見える系統性

カテゴリー「D：文章を読み取り映像化して確認する」に関する事例も、多くはない。第1学年においては、「イメージの映像化：詩を絵にしたらどうなるか考えて、表現する」というラベルで事例が見られるが、詩を絵に表すことで視点の違いに気づく指導も考えられることから、中学年などでの指導も期待したい。

4-5 カテゴリーE,F,Gから見える系統性

これらのカテゴリーは、【表現】領域であり、カテゴリー「E：挿し絵や写真などから言葉で表現する」は、映像メディアから読み取った内容を話し言葉で表現し、意欲や興味を喚起したり、共通事項や差異を確認したりする指導である。カテゴリー「F：挿し絵や写真などから文章にする」は、絵や写真、図表を手がかりに文章で表現する指導である。カテゴリー「G：挿し絵や写真などと言葉や文章と対応させながら表現する」は、挿し絵や写真と文章を対応させて、気づいたことを話し合ったり、説明したり、演じたりする指導を含んでいることは前述した通りである。表現に関する学習指導においては、映像メディアを積極的に指導に活用していないことが推測される。

【表4：学年別分類表】

ラベル	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合計
A-ものの確認	2	1	2	0	3	2	10
言葉の想起	3	2	0	0	0	0	5
状況の把握	4	6	3	1	0	0	14
あらすじ確認	4	4	1	0	0	1	10
イメージの深化	4	2	1	1	0	0	8
理解の促進	0	1	2	0	0	0	3
理解の補足	1	2	0	0	0	0	3
情報の取り出し	0	0	0	1	1	0	2
活動や方法のイメージ化	5	1	3	0	0	0	9
ゴールのイメージ化	1	1	1	0	0	0	3
B-文章からの情報を補完	9	3	2	0	1	2	17
文章との関連づけ	13	3	5	0	0	0	21
文章との比較	4	0	0	2	1	0	7
情報の一体化	2	0	0	0	0	0	2
あらすじ把握	3	0	0	0	0	0	3
情報の整理	0	0	1	0	0	0	1
C-話の内容を想像	1	0	0	0	0	0	1
次の話の予想	0	0	0	1	0	0	1
まとめ毎に関連づけて予測	1	0	0	1	0	0	2
D-イメージの映像化	3	0	2	0	1	0	6
絵の並び替え	0	2	0	0	0	0	2
E-言葉で表現	1	1	1	0	0	0	3
F-文章で表現	4	1	1	0	0	0	6
取り出した情報から表現	1	0	0	0	0	0	1
G-気づきや想像の会話表現	1	1	1	0	0	0	3
心情や感想の記述	1	3	1	0	1	0	6
図を資料に説明	0	1	0	0	0	0	1
劇化	1	0	0	0	0	0	1

言語活動を単元に位置づけている平成20年版の学習指導要領以降の教科書に準拠した指導書においては、特に「図を資料に説明」というラベルの学習指導は多くなっているのではないかと推測される。

5 成果と課題

小学校国語科指導書において展開部分に記述されている挿し絵や写真などの映像メディアの理解と表現に関する指導に関する記述から生成された指標をもとに、指導の系統性について考察を試みた結果、以下の成果と課題をあげることができる。

5-1 成果

映像メディアの理解と表現に関する指導に関しては、低学年、中学年、高学年という発達段階の大きなくりにおいて系統性はある程度考慮されているようではあるが、明確な意図があって配置されているとは考えにくいことが明らかになった。

5-2 課題

映像メディアの理解と表現に関する指導が系統性をもって指導されていくために、次の研究を継続していきたいと

考える。

- 言語活動の充実を挙げ、各教科等を貫く重要な改善の視点として示した平成20年版の学習指導要領のもとに編制された教科書に準拠した指導書において、映像メディアの理解と表現に関する指導が、どのような系統性をもっているか調査する。
- 本研究のもとになっている指標を再検討しながら、学習指導要領の指導事項と関連化させ系統性を明らかにする。

参考文献

- 滑川道夫 (1979) 『映像時代の読書と教育』 国土社
- 浮橋康彦 (1986) 「国語科教育のための「映像」の基礎論」『国語科教育第35集』 pp3-11
- 井上尚美・岩永正史編 (2003) 『国語科メディア教育への挑戦 第1巻』 明治図書
- 井上尚美・中村敦編 (2003) 『国語科メディア教育への挑戦 第1巻』 明治図書
- 奥泉 香 (2006) 「国語科教育で扱うべきビジュアルリテラシーの検討と課題—初等教育段階を中心に—」, 学習院女子大学紀要第7号 pp90-93
- 佐藤幸江, 中川一史, 中橋 雄, 石川 等, 黒川弘一, 森下耕治 (2011) 「昭和22年度版学習指導要領 (試案) における小学校国語教科書についての映像メディアの理解と表現の指導に関する分析」, 日本教育メディア学会研究会論集, pp.27-30
- 佐藤幸江, 中川一史, 中橋 雄 「映像メディアの理解と表現に関する指導の指標の比較検証—小学校国語科指導書「学習指導の展開例」に着目にして—」 日本教育メディア学会, 第21回日本教育メディア学会年次大会発表論文集
- 中川一史, 佐藤幸江, 前田康裕, 中橋 雄 (2010a) 「小学校国語科中学年における『見ること・見せること・つくること』領域のカテゴリーと到達項目の生成」, 日本教育メディア学会, 第17回日本教育メディア学会年次大会発表論文集 pp97-98
- 中川一史, 西田素子, 石川 等 (2010b) 小学校低学年国語科における「見ること」「見せること・つくること」領域の評価規準のカテゴリー化と到達項目の生成, 日本教育工学会論文誌, Vo34 Suppl. pp.137-1
- 国立教育政策研究所 「全国学力・学習状況調査の4年間の調査結果から今後の取組が期待される内容のまとめ～児童生徒への学習指導の改善・充実に向けて～」
<http://www.nier.go.jp/4nenmatome/index.htm> (平成28年12月24日参照)
- 国立教育政策研究所 「OECD生徒の学力到達度調査 (PISA)」
<http://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/> (平成28年12月24日参照)